□千原光雄，村野正昭（編）：**日本産海洋プランクトン検索図説** 1547 pp. 1997. 東海大学出版会. ¥46,350.

日本およびその周辺海域で生育の知られたプランクトンのほとんどを網羅する検索図説で，採録する種類数は，植物プランクトン580，動物プランクトン1600であり，検索図の図版の数は3719に及ぶ．執筆者は植物が15名，動物が33名である．海洋の植物プランクトンは，渦鞭毛藻類，珪藻類，珪質鞭毛藻類など以外は，微細なために，プランクトンネットから抜け落ちてしまったり，採集できても，薬品で固定すると，体が崩れてしまうなど，研究の困難なものが多かった．しかし，1970年代頃より採水・単藻培養・光顕・電顕観察などの手法により種名がかなり明らかになってきた．本書はこのようなナノプランクトンやピコランクトンである藍藻類（シアノバクテリア），原核緑藻類，紅藻類，クリプト藻類，黄金色藻類のパルマ類，ハプト藻類（含・円石藻類），ラフィド藻類，真正眼点藻類，ユーグレナ藻類，プラシノ藻類，緑藻類等についても形態，分布の記述と検索および図を与えている．植物，動物を問わず海のプランクトンに関心をもつ人には手許におきたい本であり，この分野に関係をもつ教育または研究機関，あるいは企業等の図書館にはぜひ備えたい図書である．（渡辺　信）

□Silva P. C., Basson P. W. and Moe R. L.: **Catalogue of the Benthic Marine Algae of the Indian Ocean** 1259 pp. 1996. University of California Press, Berkeley. ¥ ca. 22,000.

インド洋から記録された全海藻のカタログで，完成までに19年を費やしたという本書には総数3289種（種以下の階級の分類群も含む）が採録される．内訳は藍藻類　67属・287種，紅藻類　390属・1810種，褐藻類　96種・596種，黄緑藻類　フシナシミドロ属のみ・11種，緑藻類　77属・585種で，それぞれの種について，異名，インド洋から報告した著者，文献等が挙げられ，次いでインド洋における分布，そして分類学上の「ノート」が続く．命名規約に精通するSilva博士による「ノート」の記述は特に参考になる．日本の海藻はインド洋と共通する種類が多いので，日本の海藻研究者にとっても実に有り難い書である．（千原光雄）

□Van den Hoek C., Mann D. G. and Jahns H. M.: **Algae – An introduction to phycology** 623 pp. 1995. Cambridge University Press. ¥ ca. 6,000.

本書の主たる著者のHoek博士は1978年と1993年に共同執筆者達と藻類の教科書「Algen」を著した．要を得た簡潔な記述と複雑な生活環や細胞構造を理解しやすいように工夫して描いた豊富な図をもつ同書は多くの研究者に利用されたが，何分にもドイツ語で書かれているため，出版当初より英語版の出現が望まれていた．細胞の微細構造の研究や分子系統学の発展から，藻類の多様性・系統・進化に関する知識は最近飛躍的に増大した．本書は藻類のこの方面の知見や考え方がどのようであるかを知るのに好適である．1992年までの研究成果が収録され，類書が少ないだけに貴重な書といえる．（千原光雄）

□リンダ・グラハム（Linda E. Graham）（渡辺　信，堀　輝三訳）：**陸上植物の起源—緑藻から緑色植物へ—** 359 pp. 1996. 内田老鶴圃. ¥4,944.

アメリカ・ウイスコンシン大学で植物学を教える著者は早くから陸上植物の起源について興味をもち，陸上植物と共通の祖先生物をもつ仲間とされる緑藻コレオカエテ *Coleochaete* について，体細胞分裂，体の柔組織形成，精子形成，精子や遊走子の微細構造あるいは生態等を徹底して研究してきた学者である．本書の目的は，著者によると，情報を収集し，最近の証拠をもとに植物の起源についての仮説を検証することにある．陸上植物の定義に始まり，生物陸生化時代の地史的環境を述べる1章と2章，緑藻類の微細構造と生化学上の特性の比較および分子系統分類等に基づく陸上植物の祖先生物の探索の歴史の3章，祖先生物と目されるシャジク藻綱（この場合のシャジク藻はシャジクモ類の他にコレオカエテ目，ホシミドロ目，クレブソルミディウム目なども含む）の概説とそれらの形態・生態・生理の記述の4章と5章までがいわば前半の部で，そこではシャジク藻類

と陸上植物が共通の祖先をもつとする仮説を支持する生物学や古地史の種々のデータが検証される．後半部の6章では，仮説を発展させるためシャジク藻類と陸上植物の違いを比較し，7－9章では植物の形態・細胞構造と有性生殖，さらにはフェノール類物質の生合成経路がどのように進化したかを，これまでに得られた知識に基づき考察する．10章は，前半が‘まとめ’で，後半では，‘残された疑問や必要とされる研究課題と研究方法’が述べられる．原本は‘Origin of Land Plants (1993)’で，訳者は陸水産緑藻の分類学者と藻類を主対象とする細胞生物学者である．内容は推理小説の趣があるので，少し読み進むと，続けて読みたくなる本でもあり，急速に進展したこの分野の最近の知見を得るのに，そして同時に，どこに問題が残っているかを知るのにまたとない書といってよい．この方面に興味をもつ学生のセミナー用の副読本としても好適であろう． (千原光雄)

□Grabary D. J. and Wynne M. J. (eds.): **Prominent Phycologists of the 20th Century** 360 pp. 1996. Lancelot Press, Nova Scotia. US$ 25.

アメリカ藻類学会創立50周年を記念して出版された小冊子で，20世紀に活躍し，藻学の分野に大きく貢献した世界の藻学者40名の生い立ち，藻類研究への道，藻学研究の主たる業績等がエピソードを交えて記述される．人選に際しては，生存者でないことを前提とし，編者は世界各地のその道の人々に非公式に意見を聞き，それらを参考にしたという．掲載される学者はGeitler, Fritsch, Skuja, Hustedt, Pascher, Smith, Parke, Prescott, Setchell and Gardner, Kylin, Papenfuss, Taylor, Drew, Feldmann, Hämmerling, Pringsheim, von Stosch, Bold, Provasoli, Manton等で，日本からは岡村金太郎と山田幸男の両先生である．小型の本であり，いつでもどこでも気軽に読め，それでいて，得るところや教えられるところの多い伝記集である． (千原光雄)

□大野正夫（編）：**21世紀の海藻資源ー生態機構と利用の可能性ー** 280 pp. 1996. 緑書房．￥3,800.

これまでにない海藻の利用にはどのようなものがあるだろうか，といった内容で，応用面での海藻研究の新分野の開拓を目指した本である．14章から成り，そのいくつかを紹介すると，「伝統的食品の寒天と新しい素材のカラギナン」「海藻パルプとアルギン酸繊維の“紙”」「カンキツ類の生産と海藻資源」「磯の香りと性フェロモン」「海藻から抽出されるレクチン」「海藻から抗酸化性物質の生産」「海藻から抗菌性成分の探索」「海藻からの抗癌活性物質」などで，これらの題名からも，上記の編集方針がよく窺い知れる．執筆者に，いわゆる‘藻学者’が少なく，他分野で活躍し，現在海藻を研究対象としている方々が多いのもこの本の特徴の一つである．海藻，特に海藻の利用面に興味をもつ人には一読の価値がある． (千原光雄)